

環 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	5
瑠璃集	10
瑪瑙集	18
紅玉集	20
俳誌交歓(1)	21
光耀抄月評	22
総合誌の窓(6)	24
恵贈句集拝見(2)	26
恵贈俳誌拝見(4)	28
琥珀集作品鑑賞	30
瑠璃集作品鑑賞 I	31
II	32
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	33
八月と線香花火	34
采女伝説	36
おしよらいさん	37
能登名舟祭吟行	38

今月の一句

秋雨の瓦斯ガスが飛びつく燐寸マッチかな

中村 汀女

明治三十三年生まれ、昭和六十三年没。カチツトのある時代ではない、すべて燐寸のお世話になった時代。何よりも面白いのは中七から下五にかけて「瓦斯が飛びつく燐寸」である。燐寸がガスに飛びつくのではなく、ガスが燐寸に飛びつくと言う発想こそが発見であり、俳人の眼である。

塩路 隆子

今朝の秋

塩路隆子

天心の月の気品や夜の秋
逞しやかヤツク終へし日焼の子
朝涼し天声人語拾ひ読む
鷺何時も首のみ見せて青田風
新生姜煮たる厨の清涼感
星の夜を恍惚として月見草
蘇る樹霊水霊今朝の秋
冬瓜の生身にずばと刃を入れる

十月号光耀抄

塩路 隆子選

稲妻の垂直に立つ湖上かな
をんな坂鐘の余韻の乱れ萩
夏旺ん北極熊の怠け癖
岩魚釣る穴場親父の遺産てふ
穴まどひ武蔵の踏みし肥後の径
軒干しの海女着真白や花柘榴
夏空を一蹴乾く白シャツ
初盆や遺品の手帳読み廻し
帰国して元の生活や灸花
脱皮する蝉の産翅クリスタル
肌脱ぎのぎんばる漢太鼓打つ
桃太郎トマト熟せり陽の恵み
七夕のわが彥星の雲隠れ
冷房に嬰の寝息や無言劇
思ひ出を大事にたたみ更衣

中川すみ子
藤見佳楠子
前川ユキ子
北尾 章郎
坂上 香菜
田下 宮子
鈴木 照子
小林 成子
竹内 悦子
笠井 清佑
谷沢 秀子
能勢 栄子
駒井 のぶ
日山 輝喜
池田加寿子

朝顔を褒める隣家のをんな声

尾根伝ひ夏霧に径見失ふ

香を焚く女主人や洗ひ鮎

漆黒のキャンバス狭し大花火

美ら海の哀しや苦瓜青々と

文明を吾がものとせず団扇風

驟雨来て駆け込むこは芭蕉館

老鶯の棲める千古の杉木立

火口湖を一瞬見せて夏の霧

朝顔のフエンスに絡むアートかな

孟蘭盆会仏にともす絵蠟燭

夏帽の挙手にて止まるレトロバス

夕立来て更に親密初デート

まほらなるママの腕や夜の秋

溽暑なり傘寿の父へ告知秘す

観衆の目を一点に大花火

本堂に一喝の雷弥陀のもと

雨止めば恋路ふたたび夏の蝶

双耳壺の朱のいきいきと日雷

大島みよし

宇治 重郎

杉本 綾

森下 康子

小澤 菜美

宮崎左智子

山口キミコ

栗倉 昌子

坂根 宏子

和田 郁子

紀川 和子

増田 一代

宮田 香

秦 和子

安本 恵子

山本 孝夫

吉田 晴子

和田森早苗

伊東 和子

老杉の梢の浴びる夏月光

ロープウエイよりの全容岳の滝

炎昼や黒光りせる俣夫の腕

発条の仕掛けのさまに朝の蝉

お泊りをしたいと来る児夕焼中

懐しき藺草の香風通る

嬰をあやす夏暖簾よりばあと出て

垂直の奇岩フイヨルド夏鷗

天を指す荒彫不動雲の峰

星屑をキャンドルとして星祭

省エネの噴水人の影見えす

地獄絵の炎の如し大夕焼

涼風に薄手白シャツ快き

楠の葉の涼しさに恋ふ妣のこと

黒肝油飲み下したる昭和の日

秋海棠静かなる刻流れけり

夏まつり金魚すくいでもやぶれたよ

熱帯夜くわがたかぶとも起きている

祭りの日頭がいたいよかき氷

伊藤 洋子

片岡久美子

桂 敦子

久保田美智子

塩見 育代

杉野原弘幸

田中 浅子

長濱 順子

新実 貞子

西垣 順子

西田 史郎

藤本 秀樹

松田 洋子

山崎 里美

高 直美

佐用 圭子

中森 かな

高野 綸

広瀬 結麻

琥珀集



文庫本

藤見佳楠子

をんな坂鐘の余韻の乱れ萩

薄野に見え隠れせる女声

生駒越え葛を鎧ひし道標

女郎花風に戦ぎて黄の映ゆる

機音を閉ぢていく年藤袴

撫子を添へて返却文庫本

坪庭に桔梗咲かせて茶懐石

垂直の稲妻

中川すみ子

駅ビルのランチタイムや夏の果

久に出すミシンの針目さわやかに

いかづちに叩かれひとり経を読む

稲妻の垂直に立つ湖上かな

新調のカーテン越しに大花火

鮎鮎の個々に味あり浜の宿

日没を待ちて散歩や灸花

旭山動物園

前川ユキ子

日雷フライト前の緊張感

大雪山の淡き雪溪夕茜

チンパンジーに凝視されをりサングラス

ペンギンの撮られ上手や虹入れて

夏旺ん北極熊の怠け癖

青葉風に不意のときめき北狐

獣園の興奮覚めずシャーベット

親父の遺産

北尾章郎

土用あい

小澤 菜美

下戸の庭小振りばかりの秋茄子
蜘蛛の囲に粒をとどめし兩名残
故郷の知己減るや墓さへ懐しく
岩魚釣る穴場親父の遺産てふ
駒鳥がネーチャーガイド奥穂高
対策の相手は神よ出水川
兄遺影笑むや涼しき方へ逝き

穴まどひ

坂上香菜

今朝の秋

田下 宮子

爽やかや一番蔵は砂糖倉（出島）
秋蚊来る奥処に武蔵供養塔
爆竹を防ぐ耳栓精霊会（長崎）
穴まどひ武蔵の踏みし肥後の徑
肥後の旅馬刺し肴に冷酒酌む
最高潮の山鹿踊りを散らす雨（山鹿灯籠祭）
荷揚場を遺す出島や残暑光

重文を次ぎつぎ見遣り銚巡行
月鉾の揺れや藩邸跡あたり
一双を殊に誇れり屏風祭
ほっこりと躑く町人や戻り鉾
土用あいいつしか畑に鳥鳴かず
夜の秋向ひ峯蒼き光負へる
ベビーカーの母子ピンクに百日紅

軒干しの海女着真白や花柘榴
出漁の少年機敏夏の海
島人の日曜弥撒へ今朝の秋
夏惜しむ手書緻密な粘菌図（南方熊楠）
腕に巻く亡母の時計や白桔梗
厨事今日は手抜きよ暑に籠り
秋立つや龍子の濤はダイナミック（川端龍子）

「金」の涙

鈴木 照子

極 暑

竹内 悦子

世界新の「金」の涙や爽やかに（北島康介）

「鳥の巢」に二百の国の人暑し（北京オリンピック）

携帯の電池切れ音熱帯夜

海の日男三代漁へ出づ

向日葵や勝気なる瞳の女の子

夜の秋や空覚えせし絵本繰る

夏空を一蹴乾く白シート

蓮浄土

小林 成子

産 翅

笠井 清佑

羅をゆるりと師匠華道展

蓮百種湖畔めぐれば浄土あり

蓮あまた咲くや合掌人見ゆる

弟を偲ぶ姉妹や蓮浄土

献杯のビール湖辺の四姉妹

白蓮や一花は殊に白勝り

初盆や遺品の手帳読み廻し

帰国して元の生活や灸花

天の川煩惱一つ消えたまふ

死亡欄に恩師の名あり夜の秋

日本人の原点見たり青田風

蛇口から温き水出る極暑かな

その昔子の生れし日の溽暑かな

自家製の梅干売れり能登姫

手花火の泣き虫小僧指固く

燈花会や若人たちの夏の恋

二月堂茶店のメニュー心太

打ち水や御詠歌の鉦奈良町に

三尺寝夢の記憶に盆踊り

炎昼の羽咋海岸波ゆるき

脱皮する蟬の産翅うぶばねクリスタル

瑠璃集

墓洗ふ

杉本 綾

菩提寺の花ゆさゆさと百日紅
土用蜆厨の水を滴らす
香を焚く女主人や洗ひ鮎
抱くやうに抱かるるやうに墓洗ふ
むなしさのまたも襲へる虫の夜々

鉦 叩

森下 康子

夏空に晴らす鬱憤十尺玉
漆黒のキャンバス狭し大花火
皆去にし後の空虚や鉦叩
今生の別離切なや法師蟬
四才と「崖の上のポニョ」夏休み

夜の画布

小澤 菜美

美ら海の哀しや苦瓜^{ゴイヤ}青々と
寺辞して漫ろ涼しき膳所^{げんじょ}の浜
夜の墓をBGMに終焉記
夜の画布へ金泥垂らす大花火
浜の宿蓮はなびらに湖魚を盛り

立 葵

宮崎左智子

花火師の匂の顔もて四尺玉
み佛の千手の掴む油照り
文明を吾がものとせず団扇風
打ち水が生む風の子の通り道
番犬の面目もなし夏痩せて

鈴鹿サーキット

山口キミコ

驟雨来て駆け込むこは芭蕉館
涼風を受けて疾走ゴーカート
ジェットコースタースリル満点暑気払ひ
日傘してシャッターチャンス構へ待ち
手に団扇四囲壯観の観覧車

光耀抄十月月評

塩路 隆子

稲妻の垂直に立つ湖上かな

中川すみ子

琵琶湖湖畔のマンションに生まれる作者ならではの作品である。「垂直に立つ」稲妻のすごさ、しかも下五の「湖上かな」の切れによって、想像を越える程、身の毛のよだつ程のスケールの大きい稲妻を感じる。会心の作であろう。カメラに凝っておられる作者、是非マンションからの琵琶湖の四季を俳句と共に残していただきたい。

をんな坂鐘の余韻の乱れ萩

藤見佳楠子

美し過ぎる程美しい措辞で纏められ、シャッターチャンスのいい作品である。知る限りの作者の作風としては似合いの作品である。先ず自分の座を設定、ゆるやかな坂「をんな坂」の語のひびきの良さではじまり、鐘の音そのものでなく「鐘の余韻」を中七に、下五では余韻に揺れる「乱れ萩」を凝視してしっかりと締めくくっている。手馴れた手法により生まれた一句として見逃すことは出来ない。

夏旺ん北極熊の怠け癖

前川ユキ子

旭川動物園を訪ねられた五句の中の一句。大暑の最中、動物園の白熊が池に氷を入れてもらって嬉しそうに抱え

て泳いでいる姿を見たことがあるが、人間のみなならずこの暑さに北極熊もなす術もなくうんざりと、伸びているのである。「怠け癖」の措辞によってその肢体の様子でも見えて楽しい句に仕上がっている。

岩魚釣る穴場親父の遺産てふ

北尾 章郎

岩魚を釣っている人との会話の中で生まれた句であろう。父と違つて「親父」の言葉の持つ親しさの中に、岩魚釣りとしての父への親しみ、いや「遺産」の措辞には尊敬の念までも窺える。父から受け継いだ遺産は岩魚を釣る穴場であつたと言うが、その遺産に心からの満足を感じ、親父を偲びながらの釣りを楽しんでいる岩魚釣りが見える。作者自身も穏やかな性格とお見受けするが安らぎを感じる句である。

穴まどひ武蔵の踏みし肥後の径

坂上 香菜

江戸の初期の剣客で青年期に二刀流を案出、諸国を遍歴し、巖流島で佐々木小次郎と決闘をして勝ったことは有名である。晩年は熊本藩主の客分となり、熊本にすむ。作者は熊本を訪れたのであろう。そのときに踏まれた地は武蔵の踏んだ径であろうと武蔵を偲ばれている。色々と考えた末の決断の、晩年の熊本住まいであつた武蔵に「穴まどひ」の季語が効果的である。

脱皮する蟬の産翅クリスタル

笠井 清佑

幼いときから一度蟬の幼虫を捕まえて脱皮する一部始終をみたいものと思っていた。幼虫を男の子に貰って何度か試みたが、途中で死んでしまったり、変形した産翅を持った蟬だったり健康に脱皮するのを見たことがない。幼いころからの憧れであっただけに、この句に惹かれた。先ず「うぶばね」その後の「クリスタル」の措辞に注目した。透明感のある句である。

肌脱ぎのぎんばる漢太鼓打つ

谷澤 秀子

「瓊」での一泊旅行、御陣乗太鼓のお祭りのときの句である。最初は「ぎんばる漢」に馴染めなかった。御陣乗太鼓を打つ中のひとは肌脱ぎとなるが、この人は、年中肌脱ぎをしているから季語には弱いのではないかなどと迷うところがあった。しかしこの句、日をおくほどに、いふし銀のごとくに精彩を放ち始めた。「ぎんばる」とは気力が漲っていること（広辞苑）。御陣乗太鼓の強烈な印象をうまく表現された印象に残る句である。当日の一番の句とも言える句として評価したい。

まほらなるママの腕や夜の秋

秦 和子

お孫さんが生まれられたときの句である。「まほら」とはすぐれたよいところの意味。赤ちゃんにとってお母さんの腕は、ほんに居心地のいい「まほら」に相違ない。いい言葉を見つけられた。健やかにご成長されますことを、お祈りいたします。

ロープウエーよりの全容岳の滝

片岡久美子

駒ヶ岳へ上られたときの句である。滝の落差の大きい岳の滝を見るには余程のスペースがなければ、中々全長を見ることは難しい。後ずさりしても地上からは見られずに、心を残しながら下山する作者はロープウエイから、滝の全容を見られたと言う。感激の伝わる句である。

垂直の奇岩フイヨルド夏鷗

長濱 順子

この夏に海外へ旅をされた方が多い。ノールウエー・スイス・カナダなど羨ましい限りである。作者もその一人。生き生きとした五句を見せていただいた。その中の一句である。水河谷の沈水したものと考えられているが入り込んだ海へ切り立った奇岩の数々。大景に吞まれて、句に出来ないことが多いのに「垂直の奇岩」など無機物へのしつかりとした観察眼と、そこを飛び交う夏鷗の柔らかな動きが相俟ってすばらしい句に仕上がっている。